

日野川の歴史

第4回 日野川の漁業

杉本 良巳さん (米子市歴史館運営委員長)



大正11年の鮭漁

かつて日野川・天神川・千代川のアユ、湖山池や東郷湖のフナ、そして錦海のごす(ハゼ)を「鳥取県の三魚」といって、その珍味を愛でた。もとより鳥取県の川や海では高級で美味な魚が豊富に獲れる。にもかかわらずこれら三魚が持て囃されたのは、その庶民性にある。多くが自家用に供され、三魚によって生計を立てようとする者は至って少なく、休日利用の釣りを楽しむ人々の対象でしかなかった。こうした状況は昔も今も変わっていない。

『日野町誌』は「郷土における水産状況としては、日野川あるいはその支流で、アユ、コイ、フナ、ウナギ、ウグイその他が副業的に漁獲される程度で、本業としていわゆる水産業に従事する者はいない」と断定しているが、20年程前まではアユの漁獲で年間300万円近くの収入を得ていた人が数名いた。もとより専業である。

また、日野町や南部町では古来養鯉が盛んであった。冬期間の蛋白質の補給、来客の接待、鑑賞、さらには残飯の後始末まで鯉にさせていた。戦後、こうした状況が変わっていったのは河川の治水工事の在り方、農業や家庭排水による水質悪化によると考えられる。

大正12年発行の『皆生温泉案内』には、「日野川河口の鮭漁」と題して、「仲秋の候、産卵のため淡水をたすねて上るのを待ち、川尻に漁具をたすさえたる無数の漁夫、先を争うて漁獲するの状、真に壮快を極む。新鮮なる一尾の晩さんの膳部に上るのも、また温泉土産の一つである」と記し、日野川河口の鮭漁が盛んであったことを伝えている。

昭和10年の『米子自治史』には車尾の水産業について「アユ246kg、サケ459kg、コイ195kg、ウナギ135kg」とあるから、昭和10年頃には、まだサケが獲れていた。それが戦後の29年頃になると、アユ年産5000万円、ウグイ1000万円、ウナギ250万円、コイ200

万円(『米子市実態調査』)となり、サケは完全に姿を消し、コイもまた減少した。代わってウグイの水揚げが見られるようになった。当時、日野川水系漁業協同組合の正組合員(3か月以上漁業に従事する人)は約200人であったのに対し、準組合員は約400人いて、日野川の漁業が趣味の釣りとなっていることを物語っている。

ところで現在、日野川にはどんな種類の魚が生息しているのか、環境庁や鳥取県水産課の調査によれば、魚類で51種類以上、エビ・カニの甲殻類で5種類である。しかし、それ等の魚類は日野川全域に見られるのではなく、上流と下流では異なる。

- 上流に住む魚—アマゴ・タカハヤ
- 上流～中流に住む魚—ウグイ・カワヨシ・ノボリ・シマドジョウ
- 中流～下流に住む魚—アユ・カマツカ・ムギツク・ヨシノボリ
- 下流に住む魚—コイ・フナ・カマキリ

全域に住む魚もいる。例えばカワムツ・ドンコ・オオカワなどである。40年以前と67年に調査した結果、タカハヤ・フナ・ドンコなどは増え、他の魚はおしなべて減少している。その一方、一時期姿を消していたサケやシロウオが帰って来たのは嬉しいことである。平成18年秋、日野川漁協が捕ったサケは1237匹に達した。

“温泉名物数々あれど、鮎の巻鮓、鮭なます”

と謡われたように、再び日野川のサケが皆生温泉の名物になれば、これまた楽しい限りである。しかしそうなるには、それなりの努力が必要である。日野川漁協では稚魚の放流を続けている。近年の実績はアユ400万匹、ヤマメ10万匹、サケ15万匹、ウナギ850匹、コイ20万匹(コイヘルペスのため一時中止)である。また、アユの産卵場のため、組合員のボランティアで石1つ1つを裏返す仕事も行われている。豊かな日野川を目指す多くの人々の存在を忘れてはならない。



1本の河川を人生にたとえ、上流は青年のような元気さを感じた。

第9回 日野川フォトコンテスト入賞作品 一般Aの部 進藤 ふじ子さん
撮影場所:日野川(石霞溪)

編集後記

新年をむかえたのはつい先ほどのような気がしますが、もうすぐ春を迎えるような季節となりました。今回の特集では、日野川への想いを語る会を取り上げましたが、皆様方の発表を聞いてみると、それぞれが、それぞれの立場で日野川に対しての想いがありながら故郷の川である日野川を大切にしなければならないという想いは、やはり同じなのだということを感じました。今後も地域の皆様方とともに愛される川づくりを益々すすめることができるといった想いをあらためて感じた日でした。

あなたのところを

GET HEART

GET HEART
第38号

編集事務局
・国土交通省日野川河川事務所

〒689-3537
米子市古豊千 678
TEL (0859) 27-5484

発行
・日野川への想いを語る会

ホームページアドレス <http://www.cgr.mlit.go.jp/hinogawa>